

# 社会委員会通信

35

2009.7.5

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

6月の学習会では、秋吉先生のお勧めにより、田保寿一監督の『冬の兵士 良心の告発』のDVDを鑑賞した。2001年9月11日に起こったテロリストによるニューヨーク世界貿易センターへの攻撃直後、ブッシュ大統領は「これは犯罪ではなく、戦争である」と宣言、直ちに「大量破壊兵器」を蓄えているとして、イラクへの侵攻作戦に突入した。

イラクに送り込まれた米軍の最初の敵は「共和国防衛隊」であったが、その後は「アルカイダ」となり、最終的には「すべてのイラク市民」となって、今は軍事的には足の抜けぬ泥沼状態に陥っている。目的を失って自暴自棄になった兵士たちはモラルが崩壊し、非人間化した兵士は加害者が被害者になるという逆転現象を起こし、帰還後も市民社会に復帰できない悲劇を各所に生じている。

田保監督はテレビ朝日のディレクターであったが、2003年、「イラクの戦場で行われている事実」を報道するため辞職し、身に迫る危険を承知の上、戦場に赴き、メジャーなマスコミが意図的に無視している「米軍が無差別に市民を虐殺している場面」に立ち会うと共に、「反戦イラク帰還兵の会」の集会・デモを密着取材している。

私たちが先ず「事実を知る」ことを通してはじめて「いかに行動すべきか」が分かるようになると思うのです。このところ毎週のように午後集会が開催され、会員の集まりがどうかと心配しましたが、29名（女性18名、男性11名）の参加者が与えられ、感謝です。

若い帰還兵の告白が個人的な動機ではなく、「政府が専制政治に陥っているときには、これを変革するのは合衆国民の権利であり、義務である」というアメリカ独立宣言の基本精神に立脚していることの意味をしっかりと受け止めたいと考えています。顧みて、日支事変、太平洋戦争と続いた戦時中の日本でこのような抵抗運動が可能であったかと思うと、「長い物には巻かれる」という私たちの「抵抗精神のひ弱さ」を痛感し、大いに反省すべきではないでしょうか。

（社会委員長：K.T）

## DVD『冬の兵士 良心の告発』を鑑賞して

Y.O

この映画のプロデューサーが勤務しているテレビ朝日にこの企画を提出した時、これをやるなら会社を退職してからにしろと言われ、会社を辞めてこの企画に取り組んだとの事、誠にこの映画は一企業を超えた全世界の

注目に値するものだと思います。

イラク帰還兵達は「自分達はアメリカの国を愛している。我々は誰にも負けない一愛国者なのだ」と声を張り上げて叫びました。その言葉の裏には、アメリカ国内の為政者の苦

い顔が目には浮かび、右翼的な考えの人々の圧力や、いろいろな宗教の原理主義者達の反対運動があると思われます。

「お前達には愛国心が無い」と言われ、アメリカを愛する心を失っていると責め立てるが、どうしてか、何故なのか、我らほど家族を愛し、郷土を愛し、何ものにも変えがたくアメリカ全体を愛しているのに、何故愛国心が無いと言われ、アメリカを出て行け等と言われるのか、歯を食いしばり、声を張り上げて主張する兵士の皆さん！ 貴方の言いたい気持ちはよく分かります。

何故かと言えば、私も日本で戦争を体験しました。政府と同じ考えになれず、空襲に遭い、家は全焼させられ、父親は爆死し、そして兄を戦場で失いました。

イラクの戦場へ連れて行かれ、少年が棒を持って歩いて来るところを「撃て」と命令された兵士が、その後帰還してから、自分のしてしまった行為を悔やみ、その事で神経を長く病み、それを他人に訴えずにいられない気持ちは分かります。交戦規定がよく変更されて、自分が昨日まで正しいと思い込んでいた

ことが、明日になると簡単に変えられることに不信の念を抱く気持ちも分かる気がします。

日本では戦争中、全て上の命令に従えと言われました。上の者というのは、兵士の上官だけでなく、町の町内会長であったり、隣人の在郷軍人だったりしました。この命令は全て天皇陛下の命令と同じであり、疑うことなく、質問も許されず、唯々命に従うのみが絶対条件でした、どんなに間違っている、どんなに他になすべき事があっても、命令は絶対でした。

アメリカの要請で軍隊に入り、見も知らないイラクに送り込まれて、指揮官の命令どおりに動いた結果、自分の心に傷を受け、精神障害者となった兵士の皆様の言われる言葉の一つ一つが私の胸に響きます。

平和を作り出すためには何をすべきなのでしょう？ 先ず、苦しんでいるイラクからの帰還兵達と連帯して彼らの要望を十分聞き届け、それからイラクへ行ってイラクの一般市民と心を開いて話し合うことが緊急だと思います。



『冬の兵士』を見終わって一番強く思ったのは、今私たちが享受している日本の平和の有難みを、ぜひ若い人たちに噛みしめてほしいということです。イラク帰還兵たちのボロボロになってしまった心と生活。それと、戦

S . N

争をしないことを世界に宣言して、平和が当たり前になってしまった私たちの生活をじっくり考えてほしいのです。そして次の世代へ引き継いでいってほしいのです、「平和は守らなくてはいけない」と。

また、時々NHK が放映する元日本軍兵士の「証言記録・兵士たちの戦争」シリーズを思い出しました。第2次大戦中、ガダルカナル、フィリピン、ビルマ、中国戦線等に従軍した元日本軍兵士。高齢化してしまった彼らが、長い間の沈黙を破ってとつとつと語るの、まだ若いアメリカの「冬の兵士」と全く同じ体験でした。PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しんだ日本兵の話など、これまで私たちは知る由もなかったのです。

「冬の兵士」も「元日本軍兵士」も共通して言えるのは、若者を戦場に駆り立て、容赦なく他国の人を殺傷する命令を下した人間が誰なのか、その姿が見えてこないことです。私たちは、そこに目を向け、目を凝らし、背後にあるものを見極めなければならないと思

いました。

ただ、感心したのはアメリカが「自由の国」という側面を失っていないことです。IVAW（戦争に反対するイラク帰還兵の会）の集会やデモが首都ワシントンで堂々と展開されました。しかも現にイラクやアフガンで戦っている時に、です。戦時中の日本では到底考えられないことです。表現の自由の大切さを思い、日本がかつて歩んだ暗黒の時代に遡ることがないよう、今私たちが手にしている平和を大切にしていきたいものです。

最後に証言した「冬の兵士」が、「どうしても言いたいことがある」とVサインをかざし、発した一言「Peace!」に私の胸はじんとなってしまうました。



今までにもテレビでイラク帰還兵の現状を見たことがあった。身体的なダメージ以上のトラウマを抱えて生きている姿を見た。私は終戦の翌年に生まれたので生々しい戦争の体験はないが、幼い頃から戦争にまつわるいろいろな話を聞いて育った。そしてそれなりに想像して戦争は、怖い悲しい耐え難いものというイメージを膨らませてきたが、それもあくまで想像でしかない。

先日広島へ行く機会があり、40年ぶりに平和記念公園を訪れた。一人で公園内を歩いていると、後ろから声をかけられた。ふり向くと数名の小学生がいて、「アンケート調査のご協力をお願いします」とのことだった。子供

K . Y

たちは大きな声で「ちちをかえせ ははをかえせ・・・へいわをかえせ」という峠三吉の詩を暗誦し、「感想をお願いします」と画板の上にアンケート用紙とボールペンを置いた。その時の子供たちの真っ直ぐな姿に、漠然とではあるが、未来につながる希望に出会った気持ちになった。突然のこととはいえ、甚だありきたりの感想を書いて、かなり恥ずかしい思いで渡すと、全員が大きな声で「有難うございました」と言い、私は（お礼状）まで頂いた。それは「ご協力ありがとうございました。奈良県の 小学校6年生」と手書きされたもので、原爆ドームのスケッチと先程の詩が書かれていた。そして小さなブルーの折鶴が貼っ

てあった。

『冬の兵士』の証言は、峠三吉の詩の「ちちをかえせ ははをかえせ としよりをかえせ こどもをかえせ わたしをかえせ わた

しにつながるにんげんをかえせ にんげんの  
にんげんのよのあるかぎり くずれぬへいわ  
を へいわをかえせ」そのものだった。



「冬の兵士」(Winter Soldier)とは、アメリカ独立運動の思想家トマス・ペインが、過酷な軍務を嫌って脱走した兵士たちを「夏の兵士」と呼んだことに由来する。もともとは1971年、ベトナム帰還兵によって開かれた集会である。彼らはベトナムにおける米軍の戦争犯罪を告発した際、厳しい冬の時代に戦う兵士という意味で「冬の兵士」と称した。今回は2度目の「冬の兵士」証言集会で、「反戦イラク帰還兵の会」(Iraq Veterans Against the War)のメンバーによって、2008年3月13日から16日までワシントンDC郊外にあるシルバースプリング市で開かれた。彼らは占領軍のイラクからの即時撤退、イラクへの賠償、帰還兵への福祉の実現を目指し、闘いを広げていこうとしている。

『冬の兵士 良心の告発』はマスメディアが取り上げなかった証言集会の様様に、田保寿一監督がイラクで撮影した映像を加えたドキュメンタリー映画で、監督自身がナレーターを務めている。帰還兵の立場から見たイラク戦争の記録を綴った貴重な映画である。

映画は3つの章に分かれている。この映画には13人の証人が登場し、戦争の体験やイラク占領の実態を語っている。彼らは、イラ

T.O  
ク戦争は政策の誤りであり、自分たちが無差別殺戮をしたことを生々しく証言している。

第1章は「戦闘モラルの崩壊」。主な内容は交戦規定を無視して行われる無差別殺戮である。「ファルージャを包囲した時、交戦規定は下着を替えるよりも頻りに変わった」最初は交戦規定を守るよう求められたが、遂には動くものは何でも射殺の対象になった」と証言している。車で来たイラク人を撃ち殺し、その車のそばで兵士が代わる代わる記念写真を撮ったという証言には、衝撃を受けた。

ひどいと思ったのは、イラク市民を撃ち殺した場合の偽装工作を米軍が組織的に行っていたことである。武器やシャベル(爆弾を埋めるために使われる)を常に持参していれば、誤って市民を撃ち殺してしまった場合、それを死体の上に置けば武装勢力だったと言える。こんな偽装工作は許せない。

第2章は「銃口の先に見たもの」。アメリカは9.11の首謀者への報復としてイラクを攻撃したが、フセイン大統領はアルカイダとの繋がりもなく、イラクには大量破壊兵器もなかった。イラクに派遣された兵士は、政策を遂行するために情報操作されている。「アル

カイダはアメリカ人を怖がらせておく亡霊の一つだ」という証言があった。イラク市民が「アメリカは出て行け。なぜイラクに来たのか？我々は占領されることを拒否する！」と叫んでいたが、自分の国が他国に占領されるなんて、耐えられないことだと思う。

罪を告白する帰還兵がいる一方で、イラクの悪夢が消えず、PTSDで苦しんでいる帰還兵は多く、アメリカの大きな社会問題になっている。戦争の大義が喪失し、罪のない人を殺して平気でいられる人はいないと思う。

昨年の8月に『アメリカばんざい～crazy as usual』(藤本幸久監督)という映画を観た。この映画は、ベトナム帰還兵やイラク帰還兵がPTSDに罹り、自殺、失業、貧困、ホームレス、薬物依存、暴力等、いかに悲惨な人生を送っているかを取材・撮影したドキュメンタリー映画である。軍のリクルーターは貧乏な高校生に「軍に入れば大学へ行ける。技術を取得出来る。医療保険に入れる。貧乏から抜け出せる」と魅力的なことばかり並べて入隊を勧めるが、イラクに送られることは決して言わない。アメリカの貧しい若者は軍隊にしか希望を見出せないのが現実で、格差社会が問題だと思った。日本でも憲法が改悪されたら、同じことが起こるような気がする。藤本監督は、日本の若者にはアメリカと一緒に戦争に行ってもほしくないという思いから、この映画を作られたようだ。

最終章は「軍隊という監獄」。「あなたがたにメッセージがあります。世界中の人が理解できる、それは平和です！」という帰還兵の言葉が心に響いた。悲惨な戦争を体験した人

ならではのメッセージだと思う。前述の『アメリカばんざい』では、新兵の訓練の様子が収録されていたが、彼らには初日から人格を破壊するプログラムが用意されている。自分の頭でものを考える力を完全に奪ってしまう。軍隊は、ごく普通の若者を「『殺せ』と言われたら殺せる人間」に変えてしまう恐ろしいところだ。

堤未果著『ルポ 貧困大国アメリカ』を読んで、アメリカは私の想像以上に多くの問題を抱えた国であることを知った。世界一高い医療費で破産する人たち、急増する無保険者たち、日帰り出産する妊婦たち、急増する医療過誤、乳幼児死亡率(先進国中)第1位、一元化される個人情報と国民監視体制、入隊しても貧困から抜け出せない……。アメリカは途方もない格差社会で、貧しい若者がいるから軍隊が作れ、戦争が出来るのだと思った。

『冬の兵士』での証言は、兵士自身の体験に基づき、軍隊そのものへの疑問を表明している。つけ回されたり、恩給が支給されなくなる恐れがあるにも拘らず、良心の告発をした彼らの勇気に希望を与えられた。また、自殺したいと思うほど内面が破壊されてしまったけれども、友人や家族との関わりの中で生きる力を取り戻したという証言から、人を生かすのは愛だと思わされた。

私はこの映画を3月末に「ジャック & ベティ」で観た。初日だったので、田保監督の舞台挨拶があった。監督はテレビ朝日のディレクターだったが、イラクの取材を上司に申し出たら、「その問題(イラク戦争)はもういい。戦場を取材したいなら辞めてくれ」と言われ

たそうだ。監督は辞職に至った経緯を無念そうに話された。

映画制作には苦労がつきものである。田保監督は多くの取材をしたが、翻訳の力不足という大きな壁にぶつかった。一時は制作断念を考えたが、レイバーネットの向井さんとの出会いによって翻訳の問題は解決し、完成にこぎつけたと語られた。劇場に来ておられた向井さんに、監督は謝辞を述べられたが、この映画が多くの人の力の結晶であることを実感した。

田保監督のお話を通して、イラク戦争とアメリカで起きている変化の真実を多くの人々に伝えたいという思いがひしひしと伝わってきた。オバマ政権はイラクからの撤退政策を出す一方で、アフガニスタンへの増派政策・同盟国への協力要請策を出している。アメリカは戦争をする国である。日本がアメリカのイラク、アフガニスタン侵略戦争に加担していることに罪の意識を感じる。この映画はアメリカだけでなく、戦争協力者である私たちにも問題提起していると思った。

「反戦イラク帰還兵の会」のカミロ・メヒア議長はアメリカのジョンス・ホプキンス大

学とイラクのムスタンシリア大学による共同調査の結果をリアルな数字として受け入れ、「亡くなったイラク人は100万人を超えます。500万人以上が難民となっています。米兵の死者は4千人近くに達し、戦闘によるもの、戦闘以外の事由によるものを合わせて6万人近くの負傷者がイラク戦争から帰還してきています」と証言している。驚くべき数字である。メディアは情報を操作し、私たちに真実を伝えてはくれない。イラクでは、本当のところ誰と誰が闘っているのだろうか？イラク戦争の真実はどこにあるのだろうか？私には今もって分からない。

1991年、湾岸戦争でイラク軍が流した原油により水鳥が被害を受けたと米軍が発表した事件が、実際は米軍の空爆により製油施設が破壊されたために起きたことを指摘したのは田保監督(当時テレビ局勤務)である。アメリカでは、反戦イラク帰還兵たちの活動は、ほとんど無視されている。このテーマに日本のジャーナリストが取り組んだ意味は大きいと思う。田保監督は帰還兵たちに「あなたはアメリカにはいない真のジャーナリストだ」と言われたそうだが、この映画はジャーナリズムのあり方を考えさせられる映画でもある。



#### 社会委員会からのお知らせ

8月2日(日)に平和聖日学習会を開催します。孫 裕久牧師(川崎戸手教会)を講師としてお招きし、「関係の回復」というテーマで講演していただきます。

教区基地・自衛隊問題小委員会とヤスクニ・天皇制問題小委員会の共催で10月3日(土)13時30分から16時30分まで、六角橋教会においてDVD『冬の兵士』上映会と田保寿一監督の講演会を開催します。今回『冬の兵士』を鑑賞出来なかった方は、是非ご参加下さい。